
はだしのめがみ

梅鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はだしのめがみ

【Nコード】

N7591R

【作者名】

梅鳥

【あらすじ】

初・イナズマイレブン小説。

実は、円堂守くんが女の子だったと発覚し、本人もショックを受ける……という話。舞台はイナズマキャラバン中の陽花戸中学校。

(前書き)

イナイレ初小説。

もしも が女性だったら…というIFもの大好きです。

というわけで、『今流行のイナイレの田堂くん女体化』書いてみました。

医学的知識が豊富じゃないので、話の流れとしてそういう風だと流してくださいますよう、お願いします。

また、そういう人を馬鹿にする意図も全くありません。ご寛恕ください。

一応、健全シリアスです。カップリング要素はないつもりです。以降、後天的女体化ものの共通設定になります。

少しでも楽しんでいただけたら嬉しいです。

「円堂：最近、太った？」

「そうかな……？」

一緒に浴場に入った仲間の言葉に、円堂は視線を湯気に泳がせ言葉葉を濁した。

雷門中キャプテンにして、宇宙からの侵略者エイリア学園の邪悪な野望を打ち砕く為結成されたイナズマキャラバンのキャプテンである円堂守は、ここ数週間人知れず不調を訴えていた。

熱っぽく身体がだるい。

胸が痛い。心臓でなくもっと表面的なところだが。

そして、チームメイトの言うとおり、この厳しい戦いの旅路の途上、鍛え抜かれて筋肉がつき引き締まるどころか、丸味を帯びる……身体。

おかしい。身体全部が、今にも悲鳴を上げそう。よりによって、こんな時に。

キャプテンとして誰よりも強くなり、仲間を引っ張らないといけない立場であるのに！

焦っていた。

いつそ、キャラバンの瞳子監督に告白するべきか……。

しかし、このひたすら力を求める女性監督に真実を話せば最後、キャラバンより降ろされてしまうかもと思うと、二の足を踏もうというものである。

そうこうして一日また一日と見送っているうち、遂に、鈍く締め付ける腹痛に侵されだした。

何か悪い、病気なのだろうか？ それが、彼の双肩に重く押し

掛かる責務と相まってその不屈の精神を締め上げる。

どうしよう、どうすれば……！

そんな、ある日。

運命が、頭上に落ちた

エイリア学園、ザ・ジェネシス。友達だと思っていたヒロトは最大の敵だった。

裏切られたかのような、怒りと共に迎えた一戦は、しかし、相手の歯牙にも掛からない茶番劇。

強烈なヒロトのシュートを身体中に浴び 20失点。

「君の力はそんなものじゃない筈だよ、円堂くん」
言われなくても…諦めるものか！

腹にボールを受け、一瞬意識をも飛ばしそうになった円堂だったが、身体中の力を振り絞って立ち上がる。

脈打つ度に、痛む腹。悲鳴を上げる身体を叱咤し、構えた瞬間

生暖かいものが、内腿を伝う感触。

「……………！」

周囲の、息を飲む、音だけが、円堂の耳を捉えた。

目は、そこに流れる赤黒いモノだけを……。

「血………？」

やはり、重大な病気を抱えていたんだ！

俺は…こんなところで…死んで…しまうのか……

ほんの僅かな流れであるにも拘らず、血という血、命そのものが零れていくように。

目の前が…

暗く……………

命に別状は、ないわ。

精神的支柱を失い、崩壊寸前のキャラバンを押し留めたのは、瞳子監督の無感動な声だった。

「しかし…！」

試合は、当然中断。

「私が着いていくから、連絡があるまで待機してなさい」

ボタン、と、救急車のドアがチームメイトの余計な心配と相手チームキャプテンの視線を断ち切る。

そして、夕方

意識が戻ったわ。円堂は元気よ。

と、ようやく監督の許可が降り、仲間達はキャプテンを見舞う為、静かに廊下を歩いていった。

ここは、外科病棟。しかも、比較的軽度の患者のフロアらしく、ひそやかでも明るい笑い声がそこかしこから聞こえ、円堂の病状は深刻なものでないであろうとの推測を後押しされ、皆一様に胸を撫で下ろす。

「よかったで、やんす」

「やっぱりキャプテンがいないと、ダメっすよ」

「ああ」

1年生コンビの安直な言葉に、しかし、チームのナンバー2であり指令塔でもある鬼道も安堵を滲ませていた。

この敗戦で我等の課題も解った事であるし、早くキャプテンの顔を見て、今後の相談をしておきたい。

その時、綻びかけた一堂の空気を悲鳴が切り裂く。

なんなんだよ、それは！

「円堂…？」

馴染みの声。

しかし、いつもの明るいそれとかけ離れた、悲痛な声。

風丸は、幼馴染として長年の付き合いがあつたが、このような事は初めてだと思つた。

自然、チームは『カンファレンス室』と書かれた部屋のドアの前に立ち尽くし耳を澄ませる。

おれが、女…だつて！ バカな事言つなよ！

音の無い稲妻が、チームの中を疾つた。

あまりにももの衝撃に、聞くべきでないと解つていながらも、誰も動けない。

ドアの向こうから、

染色体の検査の結果だとか、半陰陽だとか、初潮だとか、医者だろつ声がこの結論に至つた理屈を一生懸命説明している。

だが、それも、円堂の高い声が事実ごと掻き消さんばかりに、遮つた。

信じられつかよ！

医者が宥めるように、大丈夫だからだとか、子宮や卵巣等は正常だからだとか、色々言葉を尽くしているが、そんなもの当事者にとつていか程の慰めになるうか。

女は、ダメだ…女だったら、鬼道や風丸や一之瀬、豪炎寺…みんなとサッカー出来なくなるじゃないか！！

宇宙人と戦うキャラバンは、男女混成チームである。

しかし、フットボールフロンティアをはじめとする大きな大会は、性別を問う…それは、大事な雷門の仲間達と公式戦を共にする事ができないという残酷な告知だった。

それでも、医者はやや間を置いた後、話を続ける。

君の将来を考えれば、手術をした方がいい。

幸い手術は、そんなに難しくは無く、1回で済む。

嫌だ…ッ！

絞られた魂から出したような苦痛の声に、

「円堂…ッ！！」

風丸が、ノックもせずに入るのを皮切りに、残りのメンバーが部屋になだれ込んだ。

広くない部屋の長机につく白衣の女医に、食って掛かりそうな円堂を瞳子監督が肩を掴み制止していた。

「……み、んな……？」

部屋の闖入者達は、この時振り向いた円堂を一生忘れられないだろう。

夕日を背に、見えない表情の中、瞳だけはギラギラと……それは。

「嫌だ　　ッ!！」

長く、長く尾をひく、正真正銘の悲鳴だった……。

軽く錯乱状態に陥った円堂に、医者が慌てて安定剤を投与し、ようやく事態が收拾したのは、日もとっぷりとくれた頃。

一度、帰りましょう。と、選手達に命令する瞳子監督の言動は相も変わらず表情乏しかったが、別段責めるようなものでなかった尤も、彼らを呼んだのは彼女の落ち度とも言えようが。

帰る道すから、終始無言だった彼らがキャラバンに乗り込んで、いくら重い沈黙を過ごしただろう。

「……キャラプテンが、女の子だったって、本当ですか？」
それを破る口火を切ったのは、意外にも吹雪だった。

多分、つき合いの長い雷門中の者は重すぎて耐えられず、新顔でかつ学年の違う木暮や立向居には踏み込み辛いものがあつたのだろう。勿論、吹雪にとつても重いものであつたのだが……。

「ええ。あなた達がどこまで聞いていたのか知らないけれど、染色体検査の結果間違いないですよ」

その実、瞳子にとつてもそれはショッキングな事だった。

キャラバンを率いる責任者として、選手達の病気や怪我を受け止める覚悟はできていた。吹雪の不安定な事情も。

しかし、まさか、このような事態が起こるなんて、想定外もよいところである。

また、沈黙が降りた。

「今度から円堂と着替えんとあかんのかいな、冗談きついで……
あかん、ダメや」

女性ストライカーのリカが、何とか和ませようと冗談を飛ばすが、

そんな効果などリカ自身信じられず、結局沈黙する。

「キャプテンが女の子だなんて、シヨックっす……」

「お、キャプテンが女の子だったらダメなの？ 男女差別か？」

「そういう事じゃ、ないっす！」

棘のある塔子の言葉に壁山が、慌てて両手を振る。本当に、そんなつもりじゃない。

「 そうだぞ、壁山。この事に関し一番シヨックを受けているのは、円堂自身だ」

「 鬼道さん……」

ここで鬼道が初めて重い口を開いた。

これは彼にとっても、また、シヨックなことであつたが、努めてそれを出さないよう自制していた。円堂の居ない今、自分こそがキヤラバンの要である。彼 いや、彼女が帰ってくるまで、このチームを保たなくてはならない。

「 さっきの円堂の叫び、あれが全てだ」

この世に生まれて十余年。女子から寄せられる好意の眼差しの意味すら知らないサッカーバカが、信じていた性を否定され、これから嫌というほど『女性』を押し付けられる。

その苦痛たるや、如何ばかりか。

「 円堂君、最近少し体調が悪そうな感じだったけれど……まさか」

「 僕は、気付かなかつたよ。円堂は隠すからなあ」

木野に向けられた一之瀬の言葉に、鬼道は鈍器で頭を打たれたかのような気持ちで力無く言った。

「 仲間を常に気遣う円堂らしいと言えるが……仲間として、情けない」

風丸は、右手をきつくきつく握り締めた。手のひらが爪で裂け痛みを訴えようとも……

自分はなんて愚かなんだろう。

幼馴染として長い時間接してきた筈の、円堂守の何を見ていたの

だろう。

その強さや力ばかりに目を向けて、その優しさや、時としてそれに伴う脆さを否定していた。

「円堂は、こんな不甲斐ない俺とまだサッカーしたいんだ…」

ザ・ジエネシスとの力の差に、絶望した。自分の弱さに失望した

だが、円堂は風丸に失望したわけでもなんでもない。

実は彼女だった彼は、これから、性差というどうしようもない局面を凌ぐのに、強さだけでない何かと闘わないといけなくなる。

その方が、ずっと辛い。

「俺達が、その弱さに諦めるのは、まだ早い…！」

「その通りだね、風丸君」

吹雪が風丸の硬い握り拳に手を添えながら、力強く肯いた。

「私らは、円堂の精神的なサポートをしよう！」

塔子がりカやマネージャー達を振り向きながら、檄を飛ばす。元々、彼女の円堂に抱く友情は男女を越えたものだ。何も変わらない。

「お~~~~っ!!!」

全員の拳が、振り揚がった。

「そう、まだ何も潰えていない…」

この非常事態に際して、

強さとは。

弱さとは。

そして、『キャプテンである円堂』に対する思いは。

と見直す、いいきっかけとなった。

今まで、どんなに円堂の強さや懐深さに甘え頼り切っていたか。

各々がそれを自省し、明日からの糧にしようと思っている姿に、瞳子は、このキャラバンが、より一層堅硬になろうとすることを感じた。

大丈夫、まだ、何も潰えていない。あの人の野望と、闘える。

翌朝、円堂は無事に退院する。

……が、その日練習場に彼女が出ることはなかった。勿論体調がすぐれないというのも、あるだろう。

だが、むしろ精神的なものが、彼女のサッカーに対する情熱を著しく減退させていたのに違いない。

安静にする保健室から見える筈の練習より、遙か遠くに精神を飛ばすように　ただ、無表情で窓の外の空を眺めている。

高みを目指したかった。

仲間達と高め合い、どこまでも……。

今はまだいい。だが、必ず男女の身体能力の差に追いつけなくなる日が、やってくる。

その時、おれは、こうやって往けない頂を恨めしげに見てしまうのだろうか　？

答えは、出ない。

暗い夜に、雨が降った……………。

更に、翌日。

「全員集合。円堂くんもよ」

グラウンドに全員集合させられたところに、

「守……………」

「母ちゃん……………」

円堂の母、温子の姿があった。

何故、こんなところに。と、思えど。円堂の思考はこれ以上巡らない。

「ごめんね、守……………」

温子にも、もはやこれ以上の言葉が思い浮かばなかった。

ただ立ち尽くす、娘の身体に腕を回し、抱きしめる。

それに応えて、母の胸に縋ろうとした、その時。

「もう、お家に帰りましょう?」

「え……………!?!」

円堂だけでなく、チームの間もしばし凍りついた。

「円堂:さん、あなたにはキャラバンを降りて貰います。今は、女性として身体をいといなさい」

言葉通りに体調を気遣ってか、心折れた円堂に失望してか。相変わらず表情を読ませない瞳子の宣告に、円堂は目を剥き母の腕の中間半歩後ずさる。

「そんなあ、あかんって!」

言葉を失う円堂に代わり抗議の意を籠めて叫ぶ力を完全に黙殺した瞳子は、鬼道の方へ向きなおり宣告した。

「鬼道君、あなたに新キャプテンを務めて貰います」

「お断りします」

即答だった。

「俺たちのキャプテンは円堂だけです」

「そつだ!」

皆の意思は一つである。

瞳子は、微動だにしない。鬼道が、更にたたみかけようとした時

円堂の母、温子に目配せする。

「さ、まもる……………帰りましょう?」

「……………うん」

円堂は、母の促しに逆らわなかった。逆らう気力が湧かなかった。何もかもが空虚で、大人達が敷くレールに転がされようとしている自身をどこか遠くに感じる。

「嘘でしょう…?」

円堂! 円堂! と、悲鳴混じりに名を呼ぶ皆の声も、一歩また一歩、陽花戸中学の門へと歩む足を止められないでいた。

こんな時、豪炎寺が、居てくれたら…。

鬼道は、今は遠い友の存在を切実に欲する。

彼は、迷うキャプテンに唯一意見し、時として喝を入れられる存

在。

そして、円堂はそれを受けて心の何かに火をつけ、再び立ち上がるのだ。

だが、彼の居ない今

！

「円堂……ッ！ お前が、俺達を見捨てると言っのかッ！！」

高く、口笛を鳴らす。

大気という海を飛ぶ、ペンギン達に合わせてボールを蹴る。更に合わせるのは、一之瀬と本来は豪炎寺、だが。

「円堂！ お前のサッカーが此処で終わるわけないだろ！！」

風丸が、飛び出し 渾身の力で、ボールを蹴った。

《皇帝ペンギン、2号ッ！！》

力を増したペンギンが、容赦なく円堂とその母へと飛んでゆく。これをまともに食らえば、勿論、ただでは済まない。

「鬼道君！ 一之瀬君！ 風丸君！」

冷静だと思っていた鬼道のまさかの暴拳に、瞳子は鋭い制止の声を上げるが、もう遅い！

「……ひっ！」

茶色の瞳一杯に5羽のペンギンが映る。

円堂の母温子は、恐怖に声も出ない様子だ。

キャラバンのメンバーは、皆、祈る。

どうか、自分達の心を、受け止めて 円堂！！

その時、円堂の足が、翻った。

力一杯、右手を振り上げて

「ゴッドハンド……ッ！！」

辺りが、光に包まれる。

黄金の手が、全て、受け止め。

ボールは、その胸に。

「……みんな」

円堂は、愛しげにボールを撫でた。

皆の気持ちだが、熱く、暖かく、胸に空いた何かを満たす。

鬼道が、叫んだ。

「そつだ、円堂！ お前は、強くなっているんだ！ 以前、両手でようやく受け止めた皇帝ペンギン2号を片手で受け止めたじゃないか！」

「いとも簡単過ぎて、ちょっと傷ついたけどね」

一之瀬が、苦笑する横で、風丸も叫ぶ。

「男でも女でも、関係ない！ お前が最高のゴールキーパーなんだ！」

「そつや！」

「そつつす！ キャプテンが最高です！」

皆が口々に熱く言い募る中、吹雪は、その熱をも凍らせるような一言を放った。

「僕は、女の子だったら、口説けていいけどね」

「吹雪！ お前……！」

土門が呆れた声を上げると同時に、

「これ以上、ややこしくするな！（しないで！）（しないでほしいです！）」

四方八方からの拳の集中砲火に、彼は沈む。

「あはは、みんな、酷いよ」

円堂の足が、一步、皆の下へと踏み出された。

「みんな……」

「円堂！」

「円堂くん……じゃなくて、さん！」

「キャプテン！」

よろめくように、二歩、三歩、と、歩みだす。

「円堂ッ！！」

苦いものも全て飲み込んだように、笑う、鬼道が、肺一杯に息を吸い込み　　大きな声を張り上げた。

「サッカーしようぜ！！」

皆も心を合わせて、もう一度、叫ぶ。

「サッカーしようぜ！！！！」

視界がぼやける。

熱い涙が、溢れた。

走る　　大事な仲間の所へ、ボールを蹴った。

「おおおオ~~~~ッ！！！！」

立向居をはじめとする陽花戸中学のメンバーを今一度巻き込んで、盛大にサッカーを楽しむイナズマキャラバンのメンバー達を見渡して、瞳子は吐息をひとつつく。

円堂の母は、全て解ったようにただ黙って一礼をし、帰途に就いた。

予期せぬ出来事に、どうなることかと思っただが。

これでまた一つ、このキャラバンのひとりひとりが強くなった。

円堂は、揺るがぬサッカーへの情熱を手に入れ。

そして、男子達は、傷つきながらも闘う円堂おんどのしを守る為、一層強くなるつとめるだろう。円堂にとっては不本意だろうが、男の子というものはそんなものである。

そして、何より。
サッカーの前に、男も女も力の優劣もないのだと解った。
それは、楽しいものである。

だが敢えて、私は、あの人と同じように、力を望む。
だが、それは、大事なものを守る為の力だ。
弱さをも内包した、強さ。
それを、この少年少女達が、証明してくれたのだ。
望みは、繋がる……諦めない限り、強く強く。

上昇気流を含む暖かい風が、
「円堂、屈むな、胸が見える〜！」
「ないから、いいだろ！」
「そういう問題じゃない！ ブラぐらいしろ！」
「そんなもん、あるわけないだろ！」
「そら、そっやな」

恥じらいの一つない円堂に急遽女子教育を始めた塔子達の声と、
俄かに慌てた男子の声を運んでくる。

「雨降って、地固まる…ね」

昨夜の雨が上がリ、晴れ渡る空を見上げて、
瞳子は、小さく声を上げて笑った。

- E n d -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7591r/>

はだしのめがみ

2011年3月20日09時43分発行